

刊・印・修からみた『録内御書』

はじめに

日蓮教団において宗祖滅後百年の間に成立した宗祖伝は僅かであり、浄土系教団などの鎌倉仏教諸教団と比べて極めて対照的である。その事情について、「すぐれた日蓮研究者」⁽¹⁾と評される山川智忠氏は、

苟も聖人を尊崇し、また文章の優劣の鑑賞力を有するものは、彼の雄健絶妙の聖人の記録の前に、自己の筆にかかる御伝記を書くことの勇氣は、恐らくは出なかつたであらう。⁽²⁾

と論じ、『日蓮聖人遺文の文献学的研究』⁽³⁾を著した鈴木一成氏は、

聖人の伝記は自身がこれを記述されているので、他の諸祖において見るが如く直弟孫弟等が特にそれを執筆するものなく⁽⁴⁾

と述べている。両者に共通する指摘は遺文に関わる問題を挙げている点で、前者は質的側面から、後者は内容的側面から、それぞれ上代に宗祖伝が製作されなかつた理由を挙げている。上代の日蓮門下においては、宗祖滅後から遺文収集に傾注した事実が、多くの古写本の現存からも首肯され、山川・鈴木両説は傾聴に値するといえよう。

日蓮教団内では、宗祖の遺文を『御書』と尊称し、研鑽されてきた。現状では確定した史実ではないが、『御書』は宗祖の滅後およそ百二・三十年頃に整理され、百四十

堀部 正円

余編を『録内御書』と定め、その収集に漏れたものは『録外御書』と呼ばれた。とりわけ、中世・近世の教団内では『録内御書』が重視されてきた。

日蓮教団に有縁であった加藤清正や本阿弥光悦らの影響によつて、古活字版の日蓮宗関係書籍が出版されたと指摘されているが、目録を含めた全四十一冊の『録内御書』も古活字版の出版が確認され、また整版も重版された。日蓮教団内では、これら『録内御書』に対する研究が見られるが、教団内部の研究者はあくまで教団内のイデオロギーによつて研究成果が披瀝されているように見受けられる。

近年の仏教学関連の学会でも「書誌学的研究」を謳う発表や論稿が散見されるようになったが、果たしてその書誌学的方法論が仏教学研究の勝手な感覚で論じられてはいないであろうかとの不安を感じている。学際的研究が叫ばれる昨今、仏教学に主軸をおきながらも、書誌学の基本的概念を遵守して研究を試みることで、はじめ「書誌学的研究」を標榜できることは言うまでもなからう。

本稿は、こうした問題意識のもと、日蓮教学の基本的

なテキストである『御書』のうち、教団内で最も長期にわたり信憑され、多くの出版活動が伝えられている『録内御書』について、刊・印・修という書誌学の基本的概念に照らし、その事例を挙げながら整理を行うことを主目的とする。

一、刊からみた『録内御書』

御書の書誌学的な論究は、既に江戸時代から存在する。とりわけ、勇猛院日覺の『祖書編輯考』⁶⁾は、『録内御書』『録外御書』成立背景や、写本の伝承、刊本の出版事情などが詳細に記録され、後に本書の刊本が出版されていることをひとつ取つても、広く読み語り継がれてきたことが知られる。事実、近年の御書書誌学研究では、本書を依用した論述が極めて多い。そこで、まず本書の記述を参考にしながら、近代御書書誌学研究の先駆けをなした浅井要麟氏の版の区分け⁷⁾をもとに、江戸時代の刊本『録内御書』の出版事情を列記し整理を行いたい。

①百部刷本

本書は、慶長年間に身延山で出版された。御書五大部⁸⁾

のみの出版で、一〇〇部限定で刷られたと言われていることから、「百部刷本」と称されている。『祖書編輯考』には、

要言ナル者依テ乾遠改正ノ五部ニ梓行ス焉

とあるように、後に深見要言が出版した五大部の底本で、身延二十一世日乾・二十二世日遠の編集になることを指摘している。⁽⁹⁾

② 本国寺版

『祖書編輯考』には、

元和【自ニ永正將ニ百年ニ】比ヒ。甫テ上レ梓。呼ニ之本

國寺版ト。此時録外尚秘庫ス

とある。本版は古活字版『録内御書』を指している。冠賢一氏は、『本国寺年譜』などから出版時期や背景などを検討している。近年では、古活字版『録内御書』には三種の版式が存在すると論じられている。⁽¹¹⁾

③ 通師版

『祖書編輯考』には、

功德通公【洛本法主以ニ慶長十六ニ寂】校ニ正于中山真蹟。填ニ削チ於前版。亦由テ重公ノ説。除ニ去ス重入ト。

【愚案記三三。先ニ削ニ除偽編。寄ニ附之本院ニ】其版

今存ニ于鷹峰學室。

とあり、功德院日通⁽¹²⁾の編纂による『録内御書』の出版が指摘されている。

本版について、浅井要麟氏は①②との関係性を想定しつつも、日通の生存中の出版ではないから矛盾を来すとし、おそらく録内全冊の出版だろうと主張して、「疑を存して決定を避けておく」と論じている。⁽¹³⁾冠賢一氏は、本版を次に記す寛永十九年版との関わりから浅井説を批判している。⁽¹⁴⁾本版は、一体何を指すのか明瞭ではなく、まして伝本もないことから、これ以上の議論は困難と言わざるを得ない。

なお、浅井氏はさらに「通師板再板」という一項も設けている。これは『祖書編輯考』の、

近歳有ニ宗印ナル者雕刻一スル。亦、依ル旧舊本。咸不ニ善本ナラ。

との一文に基づく。冠氏は、やはりこれを次項の寛永十九年版に比定して浅井説を批判している。しかし、この「旧本」が何を指すのか不明であり、いずれにしても日通にかかわる刊本の伝本が確認できない現状では、不明といわざるを得ない。

④四良左衛門版（寛永十九年版）

本版は、

寛永十九年壬午曆五月十三日／洛陽四条寺町大文字町

／中嶋四良左衛門致直開板之⁽¹⁵⁾

との刊記を有する。

寛永十九（一六四二）年に出版された本書について、

高木豊氏は片仮名を用いた点と、漢文部分には送り仮名を付して返り点を付けないことをその特色に挙げ、さらに校異を記さないが、底本の奥書を加えることもあると指摘する⁽¹⁶⁾。さらに、高木氏はわずかに立正大学図書館（現立正大学情報メディアセンター）と長谷寺豊山文庫の二カ所のみ現存すると伝え、冠賢一氏は両所蔵本はとも同一本であることを確認したと説明している⁽¹⁷⁾。

ところで、『祖書編輯考』には、

距寛永二十一年【中略】有勘本一【勘左工門版】

禁義九云昔本国寺版。至今之新版。寛永中。荘之本。

勘之本也。金山鈔九云。元和寛永ト與レ後。三版也。

安心録。同翼云元和已來世^三有^二四本^一。世是^ラ名^ク番號^{ハズテ}

本^ト。

とある。この記述に基づき、浅井要麟氏は四良左衛門版

とは別に「勘左衛門版」の項をたてる。しかし、寛永十九年版の目録題の下部には番号が付されており、『祖書編輯考』に記された「番號本」の異称と合致する。日寛は、

真迢が承応三（一六五四）年に著した『禁断日蓮義』の記述に基づいて勘左衛門版と指摘しているが、版權の移動があつたのか、あるいは伝承の誤りか、さらにはまったくの別本なのか。その辺については判然としない。勘左衛門版について、兜木正亨氏は「伝本には現存するものが多い」と述べているが、勘左衛門版というものの自体、管見の限り今日に伝承されていない。寛永十九年版も零本が時折確認されるが、完本の発見には至っていない。

⑤庄右衛門版（寛永二十年版）

寛永二十（一六四三）年に出版された本書は、『祖書編輯考』に見られる、

距寛永二十一年【二十年】有莊本一【莊右衛門版】

との記述がこれに当たると思われる。刊記には、

寛永二十年正月吉祥日／寺町三条上町庄右衛門

とある⁽¹⁸⁾。本版の特徴としては、一部の御書について真筆と校合した旨を記している点である⁽²⁰⁾。

⑥法華宗門書堂版（寛文九年版）

寛文九（一六六九）年に、寛永二十年版を村上勘兵衛ら四書肆による法華宗門書堂が買い上げて出版したものである。すなわち、「寛永二十年刊寛文九年印」である。本版の出版に至る詳細な経緯については、冠賢一氏の研究に詳しいが⁽²¹⁾、近時に冠氏は、従来の見解に知見を加えて整理を試みている⁽²²⁾。本版は、『録外御書』と同時に出版された。

⑦宝暦修補版（宝暦六年版）

本版は、寛文九年版に摩滅の修補や若干の訂正を加え、宝暦六（一七五六）年に村上勘兵衛が再版した。すなわち、「寛永二十年刊宝暦六年修」である。巻一の内題「立正安国論」の下部には「宝暦修補本」と記され、日蓮門下ではこれを通称としている。本版も、寛文九年版とともに『録外御書』と同時に出版された。

⑧深見要言版

本版は、先述のように①を底本とした五大部のみのもので、深見要言⁽²³⁾によって文化五（一八〇八）年から版行が開始された⁽²⁴⁾。

以上、江戸時代には八種の『録内御書』の出版が伝承

されている。これらは、『録内御書』全四十一冊あるいは五大部などの主要な御書集のみを取り上げており、その他にも『録内御書』の要文集や、『立正安国論』などの主要御書は、江戸時代後期に平仮名書き下し文の刊本が出版されているが、それらは割愛した。

なお、筆者は今回の調査過程で、これまで確認されていなかった寛永十九年版の覆刻版を発見した。本版については、稿を改めてその調査結果を報告したいと思う。

二、修からみた『録内御書』

日蓮教団内での刊本『録内御書』の研究における最大の問題点は、書誌学的視点が遵守されず、刊と修とが同時に行われていたという固定観念が存在することである。

前述したように、寛永二十年版は武村市兵衛・村上勘兵衛・山本平左衛門・八尾甚四郎の四書肆が合資運営した法華宗門書堂に買い取られ、寛永二十年版の板木を用いて寛文九年に出版された。さらに、宝暦六年には同板を修正した「修補本」が出版されている（図版1）。こうした「修補」の表記により、宝暦修補本は寛文九年版に

立正安國論

寶曆修補本

旅客來嘆曰自近年至近日天變地大飢饉疫癘
遍滿天下廣壯地上牛馬雙悲骸骨充路招死之
輩既超大半不悲之族敢無一人然開或寡利叙
即是之文唱西土教主之名或恃瘡病悉除之願
謂東方如來之經或仰病即消滅不老不死之詞
崇法華具實之妙文或信七難即滅七禍即生之
句調百座百讚之儀有因秘密真言之教慶五瓶

図版1-1 宝曆六年版 卷一—一丁表 法忍寺妙義文庫蔵

十一月二十五日

南部六郎殿

地引御書

以御眞筆校合畢

法華宗門書堂

寛文九年
三月廿辰

寶曆癸酉子歲修補之功畢

施主 山中利永

図版1-2 宝曆六年版 卷四十 刊記 法忍寺妙義文庫蔵

訂正が加えられたと認めるもの、寛永二十年版と寛文九年版との差異は考えられていない。⁽²⁵⁾

『録内御書』は、目録を含むと四十一巻で、丁数にすると全一七〇五丁⁽²⁶⁾にも及ぶことから、諸本の全丁を対照する作業は容易でない。筆者の行った対照作業も現時点では限定的なもので、断言することはできないが、寛永二十年版、寛文九年版については、同一版において修を施した形跡は、現時点では確認ができていない。また、同一板木を用いて出版された寛永二十年版と寛文九年版についても、巻四十の最終丁(二十丁裏)の『地引御書』の宛先である「南部六郎殿」が、寛文九年では削除され行数が詰められたところに、法華宗門書堂の刊記が入れられており、この修正箇所は唯一見られるものの、それ以外の表記の修正は確認できていない。

また、寛文九年版の板木に修正を加えて出版された宝曆六年版は、

日蓮宗御經書籍製本發賣所／京都市東洞院通三條上町／御用書林 平樂寺村上勘兵衛

という刊記を附したものが確認される。このことから、明治以降も出版され、およそ二百年余りもの期間、同じ

板木を用いて出版されていたことが判明する。宝暦修補本と呼ばれる本版も、板の老朽化による文字の欠損などは確認されるものの、修正を加えた箇所は確認できていない。

ただし、寛永十九年版については、諸本の調査によって「修」の形跡を確認することができた。この点について、もう少し述べておきたい。

前述のように、寛永十九年版は立正大学情報メディアセンター所蔵本（以下、「立正本」と略称）と長谷寺豊山文庫所蔵本（以下、「豊山本」と略称）の二カ所へのみ現存すると伝えられ、前者は巻十五、巻二十九の二冊を欠き、巻三十八は異本で補われている。また、後者は巻三十五の一冊を欠き、完本の現存は確認されていない。これまで数人の研究者によって両本の調査が慣行され、その出版時期の前後関係については、刊記の有無から言及されている。

高木豊氏は、刊記のある豊山本と、無刊記の立正本に着眼し、先行する無刊記本の後に、寛永十九年に刷られて刊記を付して出版したのが寛永十九年版と論じた。²⁸⁾

また、冠賢一氏は寛永二十年版は寛永十九年版を版下

にして出版されたものと想定した。すなわち、寛永十九年版の出版から同二十年版の出版までは八ヶ月の間しかなく、四十一冊もの分量がわずかな期間に出版されるわけがないことから、それ以前に寛永十九年版は出版され、その後の中島四良左衛門が板木を買い取り、刊記を刷り入れて出版したと主張した。その理由として、刊記が本文と異なる字体であり、墨色も異なる点を指摘している。²⁹⁾

高木・冠両説は、ともに大同小異の見解であり、刊記のない立正本が、刊記を有する豊山本より先に出版されたという主張であった。

さて、筆者は豊山本・立正本双方の調査をした結果、高木・冠両氏とは異なる見解を導き出した。その理由について述べてみたい。

はじめに、双方の簡単な書誌情報を挙げる。

まず、立正本は縦二十七・九^テ・横一八・三^テ（巻一）。

巻三十八のみ異本で補われている。それ以外は、らくだ色の表紙で題箋はない。原装ではなく、表紙の裏張りに巻数と表裏を示す「上」「下」が記されている。各巻には、必ず表紙の次に白紙が挿入され、刊記は存在しない

(図版2)。

次に、豊山本は縦二十五_セ、横十七_セ、五_セ(巻一)で、立正本に比べるとやや小さい。全巻原装の柿渋色表紙で、経年による劣化で表紙の裏張りが殆どはがれている。刊記があつた(図版3)。

豊山本には、全冊に「豊山殊勝金剛良誉」という押印がある(図版4)。良誉とは、天正十八(一五九〇)年(明暦三(一六五七)年に生きた真言宗の僧で、十一歳にして下野宝蔵院の応誉について出家し、智積院や醍醐寺などで遊学した。下野宝蔵院に居住後、徳川家光の命で円福寺に移り、後に六波羅蜜寺から長谷寺第六世になつた人物である。⁽³⁰⁾この押印から、豊山本は良誉の所持本と推定されるが、良誉の在世中は、寛永十九年版の出版時期と重なっている。

ところで、巻六『報恩抄上』の二十七丁裏(図版5)には、空海の真言弘通について、空海が法華経を蔑んだ様子が記されており、空海をインドの外道と同等と批判した上で、

伝教大師御存生ならば、一言は出だされべかりける事なり⁽³¹⁾

と書かれた一節がある。豊山本のその箇所の間には、

汝日蓮何故作國史如_レ是誑惑_ル乎実_ル墮獄人汝也
という書入れがある(図版5)。

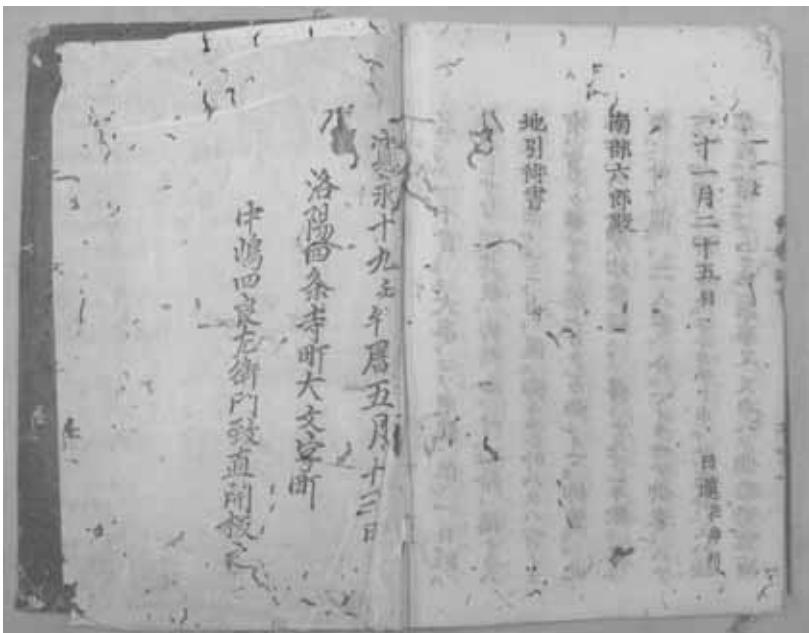
(図版6)は、立正本巻一『立正安国論』の一丁裏である。所狭しと書込がある。日蓮門下関係の寺院や人師等が所持した諸本は、御書の注釈や典拠の明記、異本の表記などが書入れられ、その本をたよりに修学した形跡が見られる。

いっぽう、豊山本は全巻にわたって殆ど記述がない美本で、立正本など日蓮門下で所持されたものとは対照的である。これは、始めから日蓮宗以外の寺院に所蔵されていた証左となる。まして、豊山本の日本真言宗の祖・空海に対する教示の註記の文言は、真言宗寺院所蔵本として特色的な注記といえるだろう。

前述した巻三十五の欠本についていえば、同巻には『法華真言勝劣事』⁽³²⁾、『真言天台勝劣事』⁽³³⁾が収載されており、同寺の誰かが別の場所に移し、そのまま逸失してしまつたのだろう。こうした点や、良誉の在世中が寛永十九年版の出版時期にあたることを、総合的に検討する限り、豊山本は一括して同寺に納められたと考えられる。



図版 2 寛永十九年版 卷四十 最終丁 立正大学情報メディアセンター蔵



図版 3 寛永十九年版 卷四十 刊記 長谷寺豊山文庫蔵



図版4 寛永十九年版 卷三十四―一丁表の押印 長谷寺豊山文庫蔵



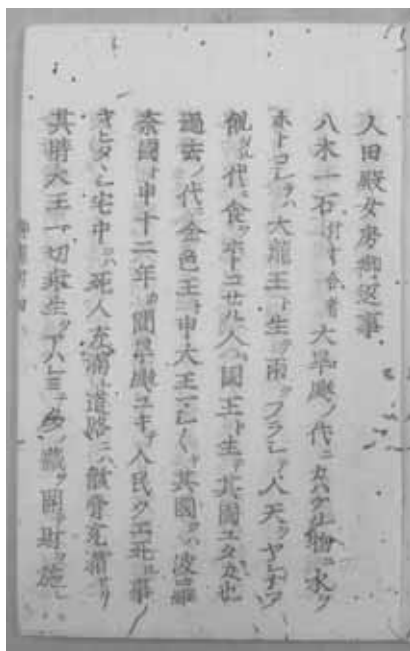
図版5 寛永十九年版 卷六―二七丁裏 長谷寺豊山文庫蔵



図版6 寛永十九年版 卷一―一丁裏 立正大学情報メディアセンター蔵

さて、高木・冠岡氏は、刊記の有無によって先後関係を論じたが、ここにいくつかの問題があるように思われる。

まず、立正本に関して言えば、原装でないことが挙げられよう。次に、豊山本では寛永十九年版の刊記が、原装の裏表紙にはりついていることを確認した。よって、立正本が原装でないことを重ね合わせると、改装時に刊記も一緒に外したと想定される。さらにもう一つ、これは、いずれの本にも言えることだが、保管の関係で巻一や最終巻は、中途の巻より破損状況が著しい場合が多い。どうしても外的接触の多い最初と最終の巻は、破損を生じやすい。立正本の最終巻（巻四十）は、ひどい破損状況とは言えないが、虫損や経年によるシミが、他の巻に比べて顕著である。改装したのは、恐らく破損の状況によるものと思われるが、巻四十に元々あった刊記が、原装裏表紙とともに外され破棄されたことも充分想定できる。すなわち、立正本は無刊記ではなく、刊記欠と考えるのである。



図版7 寛永十九年版 卷三十四―一丁表 長谷寺豊山文庫蔵



図版8 寛永十九年版 卷三十四―一丁表 立正大学情報メディアセンター蔵

筆者は、さらにもう一つ重大な発見に至った。それは「修」についてである。

卷三十四の一丁表の内題が、豊山本では「入田殿女房御返事」となっている（図版7）。ところが、立正本では「大田殿女房御返事」と正確に修正されていることを発見した（図版8）。高木氏も冠氏も「同一本」と指摘していたが、この修正の事実が確認される以上、両本には出版の前後関係を認めざるを得ない。

残念ながら、今回の調査ではこの一点の修正しか確認できなかった。さりとて修がある以上、卷三十四に関しては、豊山本が立正本に先行することは明らかである。

豊山本について、筆者は一括して長谷寺に入蔵したと考え、豊山本が立正本より先に印刷・出版されたと考え。ひとまず、修の事実が確認された以上、刊記の有無だけで出版の先後関係を論じることができない。

なお、近時、新たに発見された古活字版を版下として、寛永十九年版、および寛永二十年版が出版されたとの見解が発表された⁽³⁴⁾。要するに、寛永十九年版と同二十年版を親子関係とみるか兄弟関係とみるかという相違だが、筆者は古活字版諸本の調査を踏まえた上で、後者の見解

に賛同している。高木・冠両説の誤認は、寛永二十年版が同十九年版を版下として成立したとの固定観念に基づくものといえる。版下と指摘される古活字版の発見により、高木・冠両説は首肯されない。まして、「修」の事実を確認した今時においては、高木・冠両説を再検討する必要のあることを提言したい。

以上のように、同一の版と言われたものでも「修」が施されている事実があり、このことを充分認識することは極めて重要であろう。

三、印からみた『録内御書』

日蓮教団史上、『録内御書』は宗祖の思想や事蹟、信仰的教示などを修学するために、門下にとって必須のテキストであった。収集者は、恐らく懸命に四十一冊の『録内御書』を揃える努力を傾注したと思われる。

『録内御書』には、書込を有する伝本が数多く現存し、当時の学僧たちの修学の様子を彷彿とすることができるとくに異本との表記の違いを行間の空白部分に書き込んだ例が多く、学僧たちは『録内御書』が諸本によって表

記が異なっていた事実を認識していたようである。ただし『録内御書』四十一冊を収集作業の過程で、版の種類などは考慮せず、とにかく全冊を揃えること、だけ念頭に置いたようである。こうした収集の営みは、現在各所に所蔵される『録内御書』を一冊ずつ丹念に調べれば明らかであり、その努力がひしひしと伝わってくる。

そうした取り合わせ本の一例として、冠賢一氏が古活字版『録内御書』の調査の過程で、東洋文庫所蔵の『録内御書』に、版式の異なる古活字版『録内御書』が存在することを突き止められた。その調査報告⁽³⁵⁾によると、「巻二・三・六・八・十五・十七・十九・二十二・二十四・二十六・三十六・三十九の二十五冊が古活字版、巻九・十一・十三・二十五の五冊は寛永十九年版、巻一・四・二十三・三十八・目錄の五冊は寛永二十年版、巻四・五・十・十八・三十七の五冊は寛永二十年版かその重印本である寛文九年版、巻四十は寛文九年版」（同稿取意）とあり、諸版を寄せ集めて全四十一冊を揃えた『録内御書』であったと報告されている。調査においては、刊記だけでなく、版式、押印、書き込み、小口書きなど、あらゆる角度から、いずれの刊に

なるものか、その特定を進めなければならぬ。⁽³⁶⁾

さて、筆者も調査の過程で、多くの取り合わせ本に接してきた。そのうち天理図書館に所蔵される『録内御書』

(以下、天理本と略称) について、触れておきたい。

『新輯天理図書館図書分類目録第二 哲学宗教』(昭和四十五年、天理図書館刊) には、

日蓮御書 第一〜四〇巻 録外第一〜二五巻 日照
編 京都 めと木屋宗八 六七冊

とあり、天理本は『録外御書』の目録を含めた二十六冊とともに所蔵されている。この本の『録内御書』の巻一の内題「立正安国論」の直下には「宝暦修補本」とあり、また巻四十には、

寶暦第六丙子歳修補之功畢／施主 山中利永

の刊記が見られることから、両巻ともに宝暦六年版と理解される。『録外御書』については、巻二十五にめと木屋宗八の刊記が付されていた。また、全六十七冊にはすべてに、

昭和十四年二月四日／寄贈中山正善氏

という押印があった。したがって、現在の全六十七冊が天理図書館に納められた一九三九年の時点で、すでに一

組となっていたことが分かる。

前述のように、『録外御書』は寛文二年に初めて目録一冊を含めた全二十六冊として出版され、寛文九年及び宝暦六年に『録内御書』とともに法華宗門書堂より出版された。冠賢一氏の研究では、宝暦六年版の『録内御書』『録外御書』は、一時期著屋宗八に版權が移行され、後に再び村上勘兵衛によつて出版されたことが指摘されている。⁽³⁷⁾

天理本『録外御書』には、すべて「佐野信裕」との押印があり、さらには表紙や題箋、小口書きなどから、おそらく著屋宗八に版權があつたときに出版された全二十五冊一組のものだと考える。

しかし、『録内御書』の表紙の色や紋様はすべて同一であつたが、小口書きや所持者の書き入れなどにより、三種類からなる取り合わせ本であることが判明した。とりわけ、目録、巻二〜巻九、巻十一〜巻十六、巻十八〜四十の三十八冊を一揃えとするものと、巻十と巻十七の二冊を一揃えとするものとは、原装の題箋に異なりがあつた。前者は、例えば巻四十の場合「御書三通 四十終」となっており、収録御書の通数が記されている。一方、後者は、巻十の場合「録内御書 十」となっていて、「録

内御書」と表記されていた。なお、巻一の題箋は、後補のものである。

天理本は、版面などから全冊が宝暦修補本と思われる。

しかし、題箋については、顕著な異なりがあった。題箋のみで判断することは慎むべきなのかもしれないが、おそらく印刷されたときが異なるものなのではなからうか。

前述のように、宝暦修補本での「修」の事実は現在確定されないとはいえ、全四十一冊という膨大な冊数を一揃えとする『録内御書』は、取り合わせ本の事例が多く、研究対象とする場合は、その違いを充分に留意する必要があることを指摘しておきたい。

小 結

本稿では、刊本『録内御書』の調査研究において、書誌学の基本を遵守して研究すべきことを念頭に置きながら、刊・印・修という書誌学の基本概念を踏まえて論述してきた。

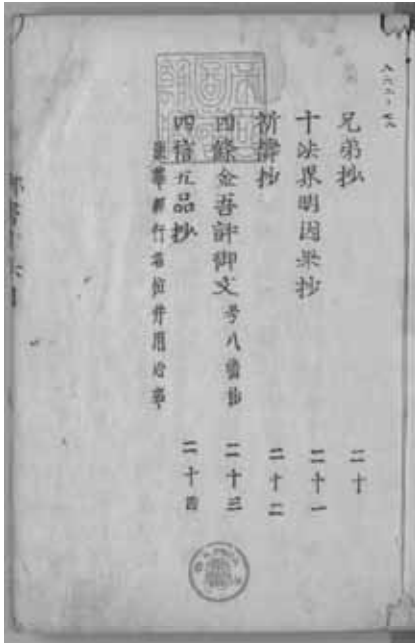
日蓮教団内にあつては、一組で所蔵される『録内御書』を、刊記に記された情報のみで無批判にその刊として見

る傾向がある。安易に刊記だけで宝暦六年版、寛永二十年版等と決定してしまうことは、表記の相違等の問題も含めて、極めて皮相的な見方といわざるを得ない。筆者は、これまで多くの図書館等に所蔵される『録内御書』を調査してきたが、巻四十はその刊に属するものであつても、別の巻が異なる刊のものであつた事例なども、数多く確認してきた。

また、本稿においては「修」の事例について、寛永十九年版のみを取り上げた。現時点では他の版における修の事実を確認することはできなかったが、「同一の版であっても、修が施されていない」等の先入観は改めるべきである点を、書誌学の基本理念から想定すべきである。

一方で、書誌学で便宜上用いられる内題第一主義により、正確な書誌内容が伝わらない事例も存する。『録内御書』は百四十余編の集合体である。一卷につき一御書ながら内題を用いても内容は正確に伝わるが、数編の御書が収録される巻に対して、一丁表にある内題を以つてその巻の代表とすることは極めて誤解した見方となる。例えば、国立国会図書館には『録内御書』の古活字版が三冊所蔵されている。二冊は巻二・巻三で、それぞれ『開目

抄』⁽³⁸⁾ 上下であり、内題使用でも内容の全容が伝わる。しかし、巻十六については一丁表の内題が「兄弟抄」であり、それをうけているが⁽³⁹⁾、同巻には「兄弟抄」のほか、『十法界明因果抄』⁽⁴⁰⁾、『祈祷抄』⁽⁴¹⁾、『四条金吾許御文』⁽⁴²⁾、『四信五品抄』⁽⁴³⁾の全五編が収録されている(図版9)。これら五編は、すべて系年も対告衆も異なった個別の御書である。したがって、内題第一主義を元に明記すると、正確に御書の収録内容が伝わらない嫌いがある。前述したように、印の差異による外題の相違が見られたことを考



図版9 古活字版 巻十六目録題 国立国会図書館蔵

慮したとき、『録内御書』に關しては柱書を用いた方が、最も正確な内容を伝えることができるように思われる。⁽⁴⁴⁾

このように、一方の見方だけを重視し、もう一方を軽視すると、お互いに誤った情報を提供することになる。現実に残存する日本の古い書物を見ると、乃至、漢籍(中国人の著作物)あるいは仏典を日本において書写または出版したものが相当量を占めている。これらを除いてしまふと、日本における書物の歴史の重要な部分が欠落することになる⁽⁴⁵⁾との指摘があるが、仏教書籍の研究は書誌学研究の中でも重要な位置にあるといえよう。この研究は、書誌学的知識と、仏教学的視野を交差させることでなし得るものと痛感するのである。

筆者は、日蓮宗関係の刊本について、いくつかの研究を開陳してきたが⁽⁴⁶⁾、今後もこのような視点を踏まえ、より正確な仏教書籍の書誌学的研究を継続していきたい。

【註】

(1) 末木文士稿「仏教研究方法論と研究史」(『新アジア仏教史VI近代国家と仏教』所収、二〇一二年、佼成出版社

刊) 参照。

- (2) 山川智応稿「古来の日蓮聖人伝の史的価値に就いて」(『日蓮聖人研究』一卷所収、一九三二年、新潮社刊) 参照。
- (3) 鈴木一成著『日蓮聖人遺文の文献学的研究』(一九六五年、山喜房仏書林刊) 参照。
- (4) 鈴木一成稿「日蓮聖人伝の特徴」(『日本仏教学会年報』一六号所収、一九五〇年) 参照。
- (5) 川瀬一馬著『増補古活字版之研究』(一九二三年、日本古書籍商協会刊) 上巻一五五・四一七頁参照。
- (6) 本書の成立年次は不詳。日躰は一七五八〜一八二四の人。翻刻及び解題が『日蓮教学研究所紀要』三五号(二〇〇八年)に収録されている。本稿では『日蓮教学研究所紀要』所収の翻刻を参考とし、小文字の注記部分は【】を附して本文と区別した。
- (7) 浅井要麟稿「御書編纂の史的概観」(『昭和新修日蓮聖人遺文全集』別巻所収、一九三四年、平楽寺書店刊) 参照。なお、浅井説を含め、日蓮教団内では「刊」「印」「修」すべてを「版」とする。ひとまず、本項では浅井説に基づく「版」を用いるが、本文中に「刊・印・修」の区別を明示する。
- (8) 『立正安国論』『開目抄』『撰時抄』『報恩抄』『観心本尊抄』の五書。『録内御書』四十巻では、巻一〜八に当たる。
- (9) 近時、この伝百部刷本といわれるうちの『観心本尊抄』一冊が発見され、紹介された。木村中一稿「新発見「慶長本」の書誌学的考察」(『大崎学報』一六七号所収、二〇一一年) 参照。なお、発見された同本の図版一葉が同氏の「論談」とともに『中外日報』二〇一三年六月二十日号五面に掲載されている。
- (10) 冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』(一九八三年、平楽寺書店刊) 二二七頁以下参照。
- (11) 池田令道稿「古活字版録内御書についての覚書」(『興風』一四号所収、二〇〇二年) 参照。なお、筆者は池田論文に対して、活字の種別に関して疑問を呈した。拙著『法忍寺妙義文庫蔵録内御書の写本と古活字版』(二〇一二年、法忍寺刊) をご参観願いたい。
- (12) 日通は、一五五二〜一六〇八。京都本法寺一〇世。長谷川等伯は日通に帰依している。『日蓮宗事典』(一九八一年、東京堂出版刊) 六八〇頁b参照。なお、日通は多くの御書の書写を遺しており、中山法華経寺に所蔵する国宝『立正安国論』の第二十四紙の書写者でもある。
- (13) 浅井要麟稿「祖書編纂史考」(『大崎学報』三二号所収、一九一三年) 参照。
- (14) 冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』二四五頁以下参照。以下、和本からの引用の場合、改行を「」で表記する。
- (15)

- (16) 高木豊稿「遺文の諸本解説」（『日本思想大系・日蓮』所収、一九七〇年、岩波書店刊）参照。
- (17) 冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』二三七頁以下参照。 兜木正亨稿「日蓮の遺文」（『日蓮文集』所収、一九六八年、岩波書店刊）参照。
- (19) 庄右衛門については、落合博志稿「江戸初期の出版事情一面―本能寺前版古活字版考・序説」（『慶應義塾図書館の蔵書』所収、二〇〇九年、慶應義塾大学出版会刊）に詳しい。
- (20) 本版については、冠賢一稿「寛永二十年本『録内御書』の刊行とその特色」（『浅井円道先生古稀記念論文集・日蓮教学の諸問題』所収、一九九七年、山喜房仏書林刊）に詳細な研究が披瀝されている。
- (21) 冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』二二頁以下参照。
- (22) 冠賢一稿「近世初期にみる日蓮宗の出版」（『日蓮聖人と法華の至宝』三巻所収、二〇一三年、同胞舎メディアプラン刊）参照。
- (23) 深見要言は、江戸後期の熱烈な日蓮宗の在家信者で、『本化高祖紀年録』『本化高祖累歳録』の祖師伝や、「日親大上人行状記」などの日蓮宗関係僧侶の伝記、さらには『高祖御書略』などの御書の校訂、出版を行った。寛政二二年（一八〇〇）には、中山法華経寺の宝蔵に入蔵して、
- (24) 御書の校合作業を行った。『日蓮宗事典』六九〇頁d参照。
- (24) 木村中一稿「深見要言開版御書五大部に関する一考察」（『大崎学报』一六三号所収、二〇〇七年）参照。
- (25) 木村中一稿「近世刊本『録内御書』の書誌学的研究」（『大学院年報』二〇号所収、二〇〇三年）参照。
- (26) 巻九・巻十一・巻十三・巻十四・巻十六・巻二十三、巻二十六・巻四十には目録題がついており、それを含む総数である。なお、寛永二十年版及び寛文九年版は巻二十三の目録題がなく、両版では一丁分減ることになる。
- (27) 寺院所蔵本の調査については、ことのほか条件が厳しく限界がある。日蓮教団内の寺院は、近世以前に開創した寺院が数多く存在するが、これら寺院の中には、調査されることなく未発見のものもあるのかもしれない。今後の更なる調査進展により、同版が発見されることを期待したい。なお、寺院所蔵典籍調査の必要性を訴えた近時の研究として、中山一麿稿「経蔵調査研究の問題点と展望」（『仏教文学』三十六・三十七合併号所収、二〇一二年）などがある。
- (28) 高木豊稿「遺文の諸本解説」（『日本思想大系・日蓮』所収、一九七〇年、岩波書店刊）参照。
- (29) 冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』二二六頁以下参照。

- (30) 『日本仏教人名辞典』(一九九二年、法蔵館刊)及び『密教大辞典』(一九八三年刊行の縮刷版にて確認、初版は一九三二年、法蔵館刊)の「良誉」項の解説による。
- (31) 『平成新編日蓮大聖人御書』(二〇一二年改訂第六刷、大石寺刊)一〇一三頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』(一九八八年改訂増補版、身延山久遠寺刊)一二二頁。
- (32) 『平成新編日蓮大聖人御書』三〇五頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』三〇二頁。
- (33) 『平成新編日蓮大聖人御書』四四六頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』四七七頁。
- (34) 池田令道稿「古活字版録内御書についての覚書」(『興風』一四号所収、二〇〇二年)参照。
- (35) 冠賢一稿「新発見の本国寺本(元和版)録内御書について」(『立正大学大学院紀要』五号所収、一九八九年)参照。
- (36) 大石寺では、一九七三年に『縮冊録内・録外』を刊行した。これは、刊本の『録内御書』『録外御書』全六十七冊の縮冊影印本である。本書の『録内御書』の刊記によれば、宝暦六年版と判明する。日蓮教団内では、この刊記情報のみによって、全冊が宝暦修補版と認識してしまいう向きがある。しかし、巻二十三は版式から明らかに寛永十九年版である。また、巻一は、他の巻と異なり押印
- などが見られない。また、寛永二十年版の板を使用する版(寛文九年版・宝暦六年版)は、すべて巻末二十六丁表に、「文応元年^{庚申}九月勘之 御年三十九/以御正本校之畢」との真蹟と校合した旨を記しているが、本書所収の巻一にはそれが無い。諸本との版式などを対照したところ、筆者は宝暦六年版と認識している。おそらく、編集者が何らかの意図で、奥付や一丁表に記された「宝暦修補本」等の記載を消去して出版したものと思われる。
- (37) この辺の事情については、冠賢一著『近世日蓮宗出版史研究』一〇五頁以下に詳しい。
- (38) 『平成新編日蓮大聖人御書』五二三頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』五三五頁。
- (39) 国立国会図書館デジタル化資料<http://dl.ndl.go.jp/info:ndl/jp/id/2532172>参照。『兄弟抄』は『平成新編日蓮大聖人御書』九七七頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』九一八頁。
- (40) 『平成新編日蓮大聖人御書』二〇五頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』一七一頁。
- (41) 『平成新編日蓮大聖人御書』六二二頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』六六七頁。
- (42) 『平成新編日蓮大聖人御書』一五二三頁、『昭和定本日蓮聖人遺文』一八二二頁。
- (43) 『平成新編日蓮大聖人御書』一一二二頁、『昭和定本日蓮

聖人遺文』一二九四頁。

(44) なお、各巻に収録された御書は、『昭和定本日蓮聖人遺文』二七七八頁以下に掲載されている。

(45) 堀川貴司稿「日本古籍の書誌学的アプローチ」(『情報知識学会誌』一八巻四号所収、二〇〇八年) 参照。

(46) 拙著『法忍寺妙義文庫蔵録内御書の写本と古活字版』(二〇一二年、法忍寺刊)、拙稿「延宝九年刊『日蓮大聖人御伝記』の成立をめぐって」(『印度学仏教学研究』六〇巻二号所収、二〇一二年)、『絵本日蓮大士御一代記』の書誌学的考察」(『印度学仏教学研究』六一巻一号所収、二〇一二年)、『書肆・加賀屋善蔵と日蓮聖人伝の出版』(『宗教研究』八六巻四輯所収、二〇一三年) など。

【付記】

図版の掲載許可をいただいた法忍寺水谷慈浄師・立正大学情報メディアセンター・長谷寺豊山文庫・国立国会図書館には衷心より御礼申し上げます。また、日蓮正宗教学研鑽所員の長倉信祐師には、文章の校閲をしていただいた。記して学恩に深謝する次第である。